
翼の生えた少女

城ヶ崎ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼の生えた少女

【Nコード】

N1997Z

【作者名】

城ヶ崎ユウキ

【あらすじ】

高校生穂枝統流ほえたしゅうるは悩んでいた。自宅の駐車場に翼の生えた少女が倒れていたのだ。彼は決断する。目が覚めるまでの間だけでも、部屋にいられてやろう、と。

ちょっとひねくれた高校生と、翼の生えた少女の、ちょっぴりシニールで、ほんのりあたたかいお話。

わりと色々なところで投下している私の古い作品です。

いきなりだが問題だ。道端に百円玉が落ちている。それを見たあなたならどうする？

とりあえず、オレみたいな奴だったらこっそりと持ち帰るだろう。仮にこれを一番とする。

二番目に思い浮かぶのは、オーソドックスに交番へ届ける、だろうな。オレは行かないが。

次に、ムシ。これが三番だ。

あとは……こんなことする奴は滅多にいないだろうが、落とし主を捜す。オレがやるとは到底思えないな。まあ、そんな優しい心の持ち主はこの四番を選んでくれ。

と、オレ的にこの四つの選択肢が思い浮かんだわけだ。そして、この選択は百円に限らず、ケータイでもサイフでもライフルでも、道端に落ちてればオーケーなのだ。

これらを踏まえて、改めて問題を出す。百円と同じ道端　　とい
うか、オレが独り暮らしをしているアパートの駐車場にそれは落ちて
るんだが　　での問題だ。

翼の生えた少女が横たわっている。そう、道端に百円玉でもケー
タイでもサイフでもライフルでもなく、翼の生えた少女だ。

選択肢は四つ。

一、持ち帰る。

二、交番に届ける。

三、ムシ。

四、落とし主を捜す。

さあ、あなたならどうする？

……ふざけてる？　いやいや、オレは大真面目だ。エイプリルフ
ールでもない。ってか『ふざけてる』はこっちのセリフだ。駐車場
の砂利ですやすやと眠っている――（それか気を失っている）、白く

て大きな翼っぽいものを背中に付けているこの少女に『ふざけてないでうちへ帰れ』と言ってやりたい。

寝てなかったら、百二十個くらいツツコミを与えてたいところだ。「……いや、待て待て。これは夢だったの」

普通に考えて、こんなものが道端に横たわってるわけがない。オレはオレにツツコミを入れた。……ただ空しい北風が吹いただけだった。

少し恥ずかしくなり、試しにそのツツコミが本当なのかどうかを調べてみた。夢か現実か調べるといえば、自分の頬をつねるのが一番だと某タヌキロボも言っていた（ような気がする）。……って、夢かどうかをそんなことで確かめる奴なんてマンガでしか見たことないぞ。誰かに見られたら完璧に引かれるだろう。

……いてえ。どうやら、この感覚は夢ではないようだ。オレも、そしてこの少女も現実の世界にいる。弱ったもんだ。

「フーかなんだよ。一日遅れのクリスマスプレゼントってか？」
アパートの駐車場にプレゼントを置くんだから、ずいぶんやる気のない赤ジジイだな。いまだきあわてん坊の赤爺さんなんて流行らないんだろう。いや、慌てて三百六十四日くらい早いプレゼントを配る、最先端をゆくあわてん坊野郎とか。……まてまて、その前にこんなプレゼント貰ったって嬉しくねえよ！ フーか誰へのプレゼントだよ！

……誰に対してボケて、誰に対してノリツツコミしてるのかわからなくなり、余計寒くなる。どうでもいいことに時間を掛けてしまった。

辺りを見渡しても、人一人、猫一匹いやしない。まあ当然か。もう日も沈んじまつたし、クリスマスが終わってまだ一日しか経つてないのに、みんな年越しの準備に忙しそうだし、連れの大瀬崎と高校帰りにゲーセン行って、そのあとコンビでアイスを衝動的に買って後悔し、そのあと適当にブラブラしてたからな。北風が冷たいってもんじゃない。だから、ここみたいなつまらないところにわざ

わざ人が来るわけがない。でも、現にこの少女はわざわざつまらないところに横たわってんだよなあ。つたく、もつと人目につく場所で寝っ転がっていてくれればよかったのに……。とにかく……助っ人はナシ、か。

オレはため息をついた。途方に暮れた白い息は風に流され、あっという間に消えてなくなった。

なんて、情景の描写なんてしてたら、もし大瀬崎がオレを見ていた場合、「よくもまあこんな不自然な格好をした少女を見てもなお平静を保って解説してて慌てないですねえ」って言われそうだ。

そんなの間違ってる。オレは平静なんかじゃない。今世界で一番パニくってんのは、誰でもない、このオレだ。

だって、女の子……しかもオレと同じ年くらいの奴が目の前で倒れてるんだぜ？ おまけに白いもんを背中に付けて。

つたく、こいつはまるで天使みたいじゃねえか。それに、寝顔がとてもかわいい。この青い髪はすべすべしてんのかな。青い髪なんて初めて見た。本当に天使みたいだ。いや、でも青を基調にしたチユニックのようなものとスカートを見ると、天使というか妖精だ。まあ、天使だと思ったのはその大きな白い翼を見たからなんだが。とても柔らかくて温かそうな翼は、コート代わりにすればちょうどいいかもしれない。

全身に突き刺さる真冬の強い風をモロに喰らった。ようやくオレは我に返ったようだ。そうそう、この少女をどうするべきか、ということだ。

というわけで、やっとオレは例の選択肢を思い出したのだ。

四択の一番、持ち帰る。

……いや、オレにそんな勇氣はない。確かに百円だったら家に持ち帰る。しかし、こいつと百円は全く違うものだ。オレの部屋に女子を、しかも得体のしれない、天使なのかもしれない、第一人間なのかもよくわからん生物を入れることなんてできない。

ちなみにこのアパートはペット禁止だそう。ただ、こいつが動

物だとは思えないので特に意味はない。

二番目、交番に届ける。

確かに迷子的な意味でこれは正しいだろう。しかし、交番はこの小道を出た大通りを右に、ダム为天端てんぽを渡って、そのまま大通りを歩き、オレの通う高校、病院、浄水場、町唯一のファミレスなどを尻目に七つの信号を渡らなければならないのだ。しかも、こいつの意識はないようなので、そこまで運ぶのは……オレですか。オレがこの子を担いで行けと？

その前に、こいつを見たおまわりさんはどんな顔すると思ってるんだ？

三番、ムシ。

オレはめんどくさがりだ。自覚している。だが冷酷ではない。こんなところにこいつを放置したら、いつか彼女は凍え死んでしまいかもしれない。オレだって今、手も足も血が通ってないし、歯をガチガチ言わせている。耳だってもう悲鳴を上げている。早く家に帰りたい。

そういえば、今日の天気予報では粉雪が降ると言っていた。結果は、雪のない猛吹雪。雪くらい降ってもいいじゃないか、ケチ。

四番、落とし主を捜す。

つまりは、こいつの身内を捜すか、妖精だったらネバーネバーランドへ、天使だったらあの世まで送るってことか。無論四番は除外だ。

身内と天国という言葉で、オレは両親を思い出した。……まあ、暗い話じゃない。オレの親は、二人とも静岡で元気に暮らしているから安心してくれ。ただ弟が昔天国と連呼してたんだ。

以上のことから結論、考え直す。そうか。

オレはこいつと極力関わりたくはない。でも、無視はしたくはないという矛盾を抱えていた。

はあ……。ついついため息が出てしまう。

どうするかな……。

こうしてオレは、翼の生えた少女と出会った。

もちろん、これから起こるドタバタも事件も何も、今の段階では何も知らないわけだが、それでもこの物語は始まってしまったのだ。

今オレは、コタツに入ってお茶を飲んでいる。飲みながらケータイのタイマーを使ってカップラーメンができる三分後を今か今かと待っている。なんとなくもどかしいが、とても幸せな気分だ。

あと、今飲んでいるお茶だが、これは親父が毎月どっさり送ってくるものだ。しかも、その量がハンパじゃない。缶ジュース一本分くらいならまだいいが、親父は洗面器大盛りを一度に送ってくる。

……飲めるわけじゃないか！ おかげでこの一室だけ和の香りが充満してるだぞ！ 客が来るたびに驚いてるんだからな！

……まあ、こう寒いとガキから飲んでて飽きたお茶もありがたい。温まる。コタツは言うまでもないが。

このアパートは一部屋、キッチントイレ付のアパートだ。家賃が安い代わりに、狭いしボロいし、風呂はないしエアコンも取り付けられない。ただオレは独り暮らしだから、一部屋だけでも十分いけるし、エアコンがなくとも、冬はコタツと根気で、夏は冷蔵庫と根気を駆使すれば何とか乗りきれぬ。

「そこまではいい。そこまではいいんだ……」

オレはため息をつく。湯呑をカップラーメンの隣に置き、腰を右にひねって下を向いた。

白いワタが見えた。いや、ワタじゃないんだ。それは翼の先端だ。そいつは畳の上できれいに広がっている。オレが広げたんだが、そちのほうに寝癖にならないかな、という憶測だ。翼に癖もくそもあるのかどうかさえわからんが。

翼の先端から少しずつ根元のほうへと視線を移動させる。翼の根元に少女がいた。

最終的に、オレは選択肢一番を選んだのだった。もちろん目が覚めたら出ていってもらうが。

ここまでこいつを運ぶときに、一つ気が付いたことがある。それは、少女の翼が付けまつ毛ならぬ付け翼ではなかったことだ。どうやら、天使のコスプレをした危ない女ではなかったようだ。まあ、この場合はそっちのほうはまだよかったが。こいつは、背中から翼が『生えて』いるのだ。こいつ、天使だったらどうしよう……。なんて、童話じみたことを本当に想像してしまった。でもオレがメルヘンチックなんじゃないぞ。こいつを見れば誰でもそう思うはずだ。かの少女は、下半身をコタツの中に、上半身にオレの布団をかぶって寝ている。翼の大半はオレの布団から飛び出して寒そうだった。が、顔色はだいぶよくなっていた。翼は温かそうな羽毛に包まれているから別に関係ないのかもしれない。こいつはすやすやと寝息を立てている。オレはホッと……していいものなのだろうか？ ケータイを開く。タイマーは残り一分三十秒だと告げていた。気のせいか、時間が長く感じられた。オレはケータイを閉じてポケットにしまう。

一息ついてからもう一度翼の生えた少女を見つめた。こうして改めて見ると、そこらの同級生みたく髪をキンキンにしてはしゃいでいる奴らなんかより、ずっと上品な顔立ちだ。外人だろうか、服装が日本とまるで違う。髪の毛が青色だが、見たところ染髪しているわけじゃなさそうだ。そういう西洋人もいるかもしれない。それに、血の通い始めた肌でさえオレよりかずっと白い。昔、お袋が言っていたことを思い出す。

「お嬢様は、ずっと家にこもってるから、日焼けしないのよ」

こいつが引きこもりなのか、ただ日に当たってないのかどうかしらんが、もしかしたらこいつはどこかのお嬢様なのかもな。

実はどこかの国のお姫様だったりして。ファンタジーっぽいな。

……というか外人・お嬢様・お姫様・ファンタジーと想像を膨らます前に、翼がある時点で異世界人のような気がしてならない。そうしたらファンタジーじゃなくてSFだな。

もんもんとしても、こいつの翼さえ除けば外見はオレのタイプだ。ただ、性格が荒かったり、地球征服を企んでたり、国連軍を一人だけで全滅させるような奴だったら話は別だが。

不意に何かが震えた。

「メシの時間だぜえ！ ゲエツヘツヘ」

「ぬうおあ！」

オレの腰が抜けた。身構えることもなく、後ずさりする。エイリアンが襲ってきたのだ。

「メシの時間だぜえ！ ゲエツヘツヘ」

もう一回聞こえた。よく聞くと、震えてるのはオレのポケットだ。そこを探してみると、硬いものがあつたので取り出した。

「メシの時間だぜえ！ ゲエツヘツヘ」

エイリアンだと思っていたケータイのアラームが鳴っていた。どうやら、カップラーメン完成のお知らせをオレに伝えていたらしい。オレは『切』ボタンを押してアラームを切った。腹が立つので、電源も切ってしまうおう。ああそうだ、あとでアラーム音変えておくか。ケータイをポケットへ突っ込み、ラーメンのカップをとった。白い湯気と同時にラーメンのうまそうな匂いが立ち昇る。食欲がそそられる。割箸で麺を混ぜると、香りがさらに際立ってきた。

そんなことをしながら思う。よく考えればよくわかるもんを、オレはなぜこんな生き物を自室にまで運んでしまったのだろうか。

かわいそうにな……と思わせる天使の誘惑か？

それとも、部屋に入れさせる、という侵略者の洗脳攻撃か？

どっちにしる笑えん。

とにかく、理由がどうであれ、こいつに害はあるなし関係なくオレは上目遣いで見つめる捨て犬をかわいそうだと思つてアパートに連れてきてしまった少年マンガの主人公とはワケが違う。いや、確

かにオレは少年マンガのひねくれキャラだが『連れてきてしまった』モノが違う。

この少女は犬じゃない。それどころか、見た目……外見……いや翼を除けばオレと同じ年くらいの女の子にしか見えない奴を連れてきてしまったのだ。

だからこそ、こいつの翼が神秘的なのだが……とかそんなことはさておき、オレは色々とヤバイことをやってしまってるんじゃないか？ ……待て、勘違いするなオレ。これは人助けだ。誰がヤバイことしてるなんて言った？ オレか。……もういい。ひとまずこいつのことは忘れよう。

オレは熱心にラーメンをすすった。のど越しが最高だ。それにこの熱さが全身を温めてくれる。

「やっぱり、カップラーメンは『ラあめん王』で決まりだよな！」
オレは人生最大の幸せを、のびのびとした声で表現した。

少しの間、あの子のことは忘れて、ラあめん王に全てを集中させてよう。

と思っただが。

「わぁ、おいしそう……」

珍しく返答が来た。

「ん、そうか？ ……なら食うか？」

「え、いいんですか！」

もちろん、とオレはラーメンをその人にやった。その人は嬉しそうに受け取り、箸をフォークのように使いながらラーメンを食べはじめた。

箸を使ったことがないのか？ それでも食うんだからよっぽど腹減ってたんだな……。と、オレは湯呑を手に取った。ラーメンの香りから緑茶の香りに移る。

今日はいつもよりにぎやかだ。理由を考えてすぐに、今日は客がいることを思い出した。そうか、今日は二人なのか。あいつの目が覚めなかったら今日はコタツで寝るか。仕方がない。

オレは少女の寝顔を見るためにコタツの右側を見た。

……あいつがラームン王を懸命にすすっている。

オレはお茶を口にした。

そして、盛大に吹き出した。

「わっ！　だ、大丈夫ですか？」

オレではないもう一人の人物が言った。大丈夫ですか？　と言われてもお前のせいでオレはシユールな対応しちまったんだ。

知らぬ間に少女の目が覚めていたのだ。ケータイのアラームか、あるいはラームン王の匂いでだろうか。

オレは咳き込みながら、袖で飛び散ったお茶を拭いた。ちらりと少女を見ると、驚いたような顔をしていたが、すぐにクスクスと笑った。とてもかわいらしい笑顔だ。

「……あ、初めまして、ソフィア・ブルースカイです。あなたが私を助けてくれたんですね？」

……ん？　今こいつは自己紹介をしたのか？　なんて唐突な。でもまあ、紹介してくれたんならオレもしないといけないんだよな。

オレは中途半端に律儀なのであった。

「オレは穂枝ほえだ統流とへるだ。助けたっつーか、お前がアパートの前で倒れてたからだ。無視したくても無理だったし」

適当に言っというた。よくわからん奴への自己紹介はこのくらいで十分だろう。それに、ソフィアとかいう少女の口調は穏やかで明るいが、実は心理作戦の一環だという可能性もある。

ソフィアはオレの紹介聞きながらうんうんと頷いてラーメンを食っている。

「そうなん……はふはふ、ですか。でも、ほふほふに、ありがとふごはいはふ。あ、おいひいです」

「ラーメン食いながら礼言われても困る。それに意味わからん」

最後の『あ、おいひいです』って、お前なあ……。

ソフィアはハツと我に返ったようだった。ラームン王をコタツの上に置き、箸を手元に置いた。ついでに青い服のしわも伸ばす。

「失礼しました。あなたは命の恩人さんなのに、私はもう少しであなたをテリヤキバーガーだと思っちゃいました」

「腹減りすぎだろおい！」

オレは苦笑いをした。人を食べ物だと思ってしまった人間を初めて見た。とにかく、オレがそうツッコんだらソフィアは身を乗り出してきた。こいつの無駄に長い袖がラーメンのスープに付きそうだったが、めんどいので何も言わない。

「そうです！ お腹が減って、こんな寒いところで迷子になっちゃったんです！ 疲れちゃって、じりじりした駐車場で、出来立であつあつアップルパイや、暖炉の暖かい光に包まれたお部屋とか想像してたら、限界が来てしまったようです」

「マツチも持たずに路上で果てるマツチ売りかよ……」

ツッコんだ。やれやれ、意識せずともため息が出る。ってか、マツチも持たずに路上で果ててしまつては、もはやマツチ売りの少女じゃない。

「ちなみに限界は空腹のほうです」

「空腹かよっ！」

オレは、こいつが凍えそうだったから、貧乏だけど最大限の善を尽くしたつもりだったんだぞ。腹減ってたから倒れたって、オレの行いはなんだつたんだよ……。

「で、お前はどこに住んでるんだ？」

言いたいことは山ほどあるが、グチは漏らさずに要件だけ言っておく。早くこんな奴母国がどこかへ帰ってもらいたい。今だつてオレの夕飯食ってるし。もう返してくれよ。

「みふぁいです」

「食ってから言え」

どうしよう、こいつとかかわるのやめようかな……。

ソフィアはラーメンと箸を置き、口を四、五回モグモグさせてから麺を飲みこんだ。

そして一言だけ言った。

「未来です」

「はあ？」

思わず大声を出してしまった。しまった、ソフィアは空腹で頭がパーになってしまったらしい。すぐに出ていってもらおう。

「未来です。たぶん過去へ旅行に行こうとしたら、タイムマシンが故障して、時空をずつとさまよってたんです。だから、何も食べてなくて……」

過去？ ここは現在のはずだ。こいつは何を言ってるんだ？ 未来ってなんだよ……。しかも、多分……だと？ オレは一瞬ワケがわからなかった。でもソフィアの瞳を見た。こいつは絶対にウソをつかない目をしていた。オレの直感がそう言う。眼差しはオレを捉え、揺るぎない。頭も大丈夫みたいだ。だからこそ徐々に真実が曇ってきてしまったのだ。

ソフィアの話は続く。

「それで、やっと時空から出れたと思ったら、今度は異常気象ですよ！ 寒いなのんのって……！ よく統流さんはこんな寒いところで生きていけますね」

ああそっか。やっと意味が通じた。こいつは今ボケをかましているのだ。オレが十六年磨いてきたツツコミを待っているんだ、こいつは。

ならやっつてやろう。

「いや。ソフィア、この寒さが普通だから」

状況から冷静なツツコミを試してみた。だが、ソフィアはきょとんとしている。あれ？ ツツコミ失敗？ ああそっか、オレ意識してからツツコミと外すんだった。

「え、そうなんですか……？」

ソフィアが真面目に訊いてきた。そんな目で見られてもなあ。確かに今日は寒いがこれが平年並みだぞ。

「……あれ、こっつて何世紀ですか？」

ソフィアがまたよくわからんことを尋ねてきた。

「十九世紀」

「冗談なしです！」

「ご、ごめんなさい！ オレがお前にボケるのは似合いませんでしたね！ と、オレはこんな感じで軽いノリのだが、ソフィアの方はずいぶんと必死だった。顔面蒼白という四字熟語が似合う。」

「……スマン、今は二十一世紀だ」

なんか、正直に答えるというのはバカらしいな。それとも問題自体がバカらしいのか。

だが、ソフィアのほうは白と青の顔から白が抜け、真っ青になっていた。

ツツコんでもダメ、ボケてもダメ、普通に答えてもダメ……。じやあオレはどう言えばいいんだよ、翼の生えた少女さん！

「どうしよう……。タイムマシンのない世界の人に色んなこと言っちゃったよお……」

ソフィアは顔を手で覆ってしまった。というか、タイムマシンが禁句なのか？

過去の人間に「タイムマシン」と言ったら人類滅亡。そんな理由だったら笑えないが笑える。

……仮に、仮にだ。本当にこいつが未来から来たとしたら、どうだ？

未来には冬が来ないのか？

時代を歩き来ることができるのか？

タイムマシンがあるのか？

未来の人間には翼があるのか？

……違う。違う違う。ウソに決まってる。そうさ。

第一オレはそういう理解できないようなことには興味ない。

未来の世界に冬が来ないんじゃない。こいつは赤道直下の国出身なんだ。

時代というのは……そうだ、その国でいう『国』という意味で、過去とか未来とかいう意味は全くない。国を歩き来するのは別に変

なことじゃないから大丈夫だ。

タイムマシンってのは、こいつの国で、他の人には絶対言っちゃいけない言葉か道具なんだ。

それで、その国では十五歳になると翼を背中に移植するしきたりなんだ。ちなみに十五歳という年齢は勘だ。ついでに言うと、オレの勘は当たらない。

で、こいつが日本語ペラペラなのは、こいつの母国語が日本語ってことでオーケー。

だからオレは信じない。こいつは未来人じゃない。ただの外国人だ。

オレの中では整理がついたが、ソフィアは相変わらずうなだれていた。顔を見せてくれない。少し心配になる。

「あー、そんなにヤバイことなら他の人には黙っておくぞ」

だからそんなことを約束してしまった。すると急にソフィアが顔をあげた。それも、とびっきりの笑顔をオレに見せて。

「本当に？」

その笑顔を見せられて、オレは冗談だとは言えなくなってしまった。

「あ、ああ。いいぞ」

言いきるか言いきらないかの境で、オレの前方から重くてやわらかいものが飛び込んできた。そして、のしかかるようにしてオレを押し倒す。

「ありがとう！ 本当にありがとう！ 統流君っ！」

ソフィアは翼をばたつかせながら言った。

状況がよく理解できない。なぜオレを抱きしめるんだ。……オレ的に、これはソフィアの民族で喜びを表す行為なのだろう。とりあえず翼でお茶をこぼさないよう祈りたい。

数分後、ようやくソフィアが落ち着いた。少し伸びたラームン王

をソフィアは完食した。それを見計らって、余ったヤカンのお湯を使ったお茶をソフィアに淹れてやった。

オレは息を吹きかけてお茶を冷ましているソフィアの向かいに座る。

「さてと、ラーメン食ってる時に聞かせてもらったが、タイムマシン……とやらないと元の時代……お前の国に戻れないんだな？」

「うん」

「で、それはこの時代……日本にあるんだな？」

「……たぶん」

「多分、ねえ。まあいい」

オレは残ったお茶を一気に飲んだ。ずいぶんぬるかった。

「一緒に探してくれるの？」

ソフィアが目を輝かしている。こいつはずいぶんとオレになついてしまったようだ。口調が数分前と全く違う。

「いや、誰が探すなんて言った。ただオレは今夜は泊らせてやるから、朝になったら出ていってもらおうと言いたかったんだ」

「え……」

ソフィアは目を丸くした。

オレにも事情があるんだ。大家さんや隣の鈴木さんがこいつを見てなんて言うか、クラスメイトがいきなりやってきたらなんて言うか、金だつてない、部屋だつて二人だと狭い、などなど。まあ、こいつが起きるまでここは貸してやる、ということだからいいだろ。

「そつだよね……。やっぱりそつだよね……。統流君も大変だもんね……」

心の底から悲しんでいるのがよくわかった。だが、人間というものは心を鬼にすることも必要だし、苦しみを味わうことも大切なんじゃないか？ きつとそれは翼があるない、時代……つまり国籍も関係ないと思う。……だろ？

ソフィアは少し経ってから頷いた。ソフィアはもうお茶を飲まなかった。

今夜は早く寝ることにした。ソフィアは朝に出ていく、ということになってるので早起しなればならない。まあ学校もあることだし得っちゃ得だ。

……なんて言い訳が思いついた。本音は、ソフィアと無言でいることが気まずいだけだ。

今夜はコタツで寝ることにする。ソフィアにはオレの布団を貸してやった。一日だけならコタツで寝ても風邪を引いたりはしないだろう。

夜中、寒さで目が覚めた。電源の入ってないコタツの中はかなり冷え込む。部屋は真つ暗だった。

ただ暗闇の中で少女の声がある。

「パパ……ママ……」
ソフィアだ。

急にオレの胸が痛んだ。そりやそうだ。よくわからない時代……国に迷い込んでしまったのだから。誰も行ったことのない時代……国からこいつは日本に来てしまったんだ。

知ってる人は誰もいない。その中で、オレはソフィアを突き放そうとしている……。

タイムマシンというソフィアにとって大切なものはどこにあるのだろうか。ソフィアはきつと日本にあると言っていたが、それは本当だろうか。きつと、くらいのもんだったら外国にある可能性だつてある。

じゃああいつは海を渡るのか？ 空は飛べるだろう。でもな、ソフィア。

食いもんはあんのか？

金はあるのか？

寝るところはあんのか？

……ねえだろ。

じゃあお前はこの寒い中、一人で生きていけねえだろ。

そしてオレ、せめて春までだけでもあいつをここに居させてやってもいいんじゃないのか？

オレはめんどくさがりだが冷酷じゃない。そうずっと前から思ってるはずだ。

気がつけば朝になっていた。いつからか寝てしまっていたらしい。このくそ寒い冬の朝なのに小鳥がたえずさえずっていた。

もう決心がついていた。よし、ソフィアを春までここに居させてやろう。それがいいに決まってる。コタツから抜け出してソフィアを探した。

だが、部屋にはオレしかいなかった。スズメたちが空しさを演出している。マジかよ。もう出ていつちまったのかよ。ウソだろ……。ケータイを開く（電源がラームン王の件で切れていたの、イライラとボタンを長押しして起動させた）。六時半になったばかりだった。外はまだ薄暗い。オレの布団は押入れの中にきれいにたたまれている。

鳥の声。ふとオレは思った。オレはあいつのことを天使天使思ってたが、あいつの翼って鳥の翼なんじゃないか？ 昔、お袋が言っていたことを思い出す。

「鳥は、どんな動物よりも、早起きなのよ」
「ごもつともだ。」

押入れを閉め、次に冷蔵庫を開けた。中には卵なりヤキソバなりが入っていた。昨日のままだ。

「あのバカ野郎……。食うもなくて旅なんかすんなよ！」

オレは思い切り冷蔵庫のドアを閉めた。そして厚いジャンパーを二着用意し、勢いよく部屋を出た。

外は予想以上に寒かった。ここが険しい山中だったら確実に雪が降る寒さだが、この地域のことだ。どうせ期待はずれの曇りだろう。だが今日に限ってはそっちのほうが嬉しかった。視界が開けるし、ソフィアも雪よか風のほうがいいはずだ。もちろんソフィアに旅をさせるつもりなどオレには微塵もなかったが。

起きたばかりで、しかも眠りが浅く、走ると体中がギシギシいつている。でもオレは走らないといけないように思えた。ソフィアがどこにいるか、そんなのあいつに聞かなきゃわからない。だから頼れるのはオレの勘だ。いつも外れるが今回ばかりは当たってくれ。

直感で小道を右へ左へ曲がった。今はただソフィアのことで頭がいつぱいだった。だからどんなに冷たい風が顔面に直撃しても、耳が冷えて激痛がジワリと奥のほうまで染みてきても気にならなかった。

数分後、実際は数十秒後かもしれないし数十分後かもしれないが、オレはアパートの近くにある公園に立っていた。まだ日は昇っていないが、東の空はもう明るい。なぜかはわからないが、ソフィアがすぐ近くにいるとオレの勘が知らせていた。

この公園は、サッカーや野球ができるくらい広い割には陰気くさい。確かに朝つぱらだから暗いし、人は誰もいない。だがそれ以外の何か……そう、カラスだ。カラスの鳴き声が遠からず聞こえるのだ。だから不気味な空気が漂ってたんだ。しかも一羽二羽じゃない。大群の鳴き声だ。

それは公園の奥にある雑木林からだった。突然黒い塊がわつと現れた。あそこだけ夜中なんじゃないか？ と思えるほどの量だ。ふと 恐らく誰もが気のせいだと思っただろう 一瞬だけ白い部分が見えた。

オレにはそれが何かよくわかった。ずっと見続け、そして探し求めていたものだ。オレの勘が珍しく当たったのだ！

「ソフィア！」

オレはとっさに大声を出し、そこら辺に落ちている枝から一番大

きいものを手にし、カラスの集団向かって突っ込んだ。思えば戦士
気取りだった。

理由は知らんが、ソフィアがカラスに襲われている。

頼むソフィア、オレに気付いてくれ。そして、こっちに来い！

オレは何度も何度もあいつの名を叫んだ。近所迷惑なんて関係ね
え。そんならカラスの方がよっぽど近所迷惑だ。カーカーうっさい
し、生ゴミあさるし、それに……カラスのくせに賢いしよお！

ソフィアが黒い塊から顔を見せた。

「ソフィア！ 大丈夫かつ！」

オレがこれ以上ないほどの大声をあげると、あいつと目が合った。
やべえ、ちよつと嬉しい。

思いが伝わったのか、ソフィアは懸命に黒い塊を引き連れて近づ
いてきた。

オレは近づくとそれを睨むと、無性に腹が立つてきた。オレの血が
うずめき、心臓が高鳴る。

これは……これは、覚醒というものなのか？ オレは今、誰より
も強い気がする。

そうだ、今しかない。今こそオレは、秘めた力をカラスどもにぶ
つけるのだ。

いけ、オレのフルパワーツツコミ！

「カラス！ お前らは昔、スゲー霊鳥だったろうが！ なのにお前
らはどこまで墮ちぶれれば気が済むんだよ！」

カラスは『ソフィア』という叫びには応じなかったのに、オレの
ツツコミには驚いたようだった。恐らく、これほどまでの数の動物
を、ツツコミ一本で散り散りにさせたのは世界でオレくらいしかい
ないんじゃないか？

そう、これがオレの覚醒して得た力、その名も『滑り気味のツツ
コミ』……って、いつもどおりじゃねえか。

ああ、そういや枝、いらなかったな。とオレは太い枝をそこら辺
に捨てた。

閑話休題。カラスは去り、公園に残ったのはオレと白一点だけだった。それは木の葉のように地面に着いた。オレはそいつに駆け寄る。

翼の生えた少女は傷ついていた。手も足も翼にも、まるで定規で引いたように真っ直ぐな赤い線が引かれていた。服は奇跡的に無傷だったのが信じられなかった（それはきつと、未来の……ソフィアの故郷の服は素晴らしく丈夫なんだと解釈した）。オレはすぐに持ってきたジャンパーをソフィアに羽織らせた。翼が邪魔だったので前後反対に着させると、ソフィアは弱々しく微笑んだ。その顔にもいくつか傷があつて、痛々しい。

「えへへ、また統流君に助けられちゃいました。カラスさんに挨拶したら、つつつかれちゃった」

「カラスに挨拶するか？ 普通……」

「します、普通なら」

オレはソフィアの冷たい手をやさしく握ってやった。オレの手も冷えてるだろうけど。

「これからの旅が心配です……」

「その前に、食いもんなしで旅するバカがどこにいるってんだよ」

「私がいま……」

思わず失笑した。ああ、そうだな。あんたみたいなバカ、どこにもいないさ。

「さて、帰るぞ。歩けるか？」

オレは立ちあがり、手を差し伸べると、ソフィアは小首をかしげた。

「帰るって、どこに？」

ソフィアは、オレの手に掴まって立ち上がりながら言った。

オレは、苦笑いをした。さつきは失笑してしまったが、こいつはオレに様々な笑いをさせるためにボケを言ってるのか？

「決まってるだろ、オレの家だ。その傷じゃどこも行けないだろ？ つーかお前が外飛んでたら……まあ歩いててもそうだが、誰かに

見られたらユーフォー騒ぎになる」

とオレはソフィアの翼を指さした。慣れとは恐ろしいものだと身に沁みて感じた。こんな奴を放し飼いにしたら、世界中が大混乱してしまうのに、なんで夜のオレはこいつを手放そうとしたんだろう。

「でも、統流君に悪いです！」

「……やれやれ、こいつは鈍感なのか？」

「いいんだよ、そんなこと。それよりお前は早く元の時代……故郷に戻りたいんだろ？ オレも協力する」

真夜中のソフィアの眩き　パパだママだのあれ　を聞いたとき、当たり前前にことに気付いた。こいつは淋しいのだ。淋しいに違いない。

だから、オレはぼけつとオレを見つめるこいつに言ってやった。

「早くタイムマシンとやらを見つけようぜ」

ソフィアの表情が、パツと明るくなった。日の出の瞬間のような、あんな感じた。

「本当に？　嬉しい！」

ソフィアがまた抱きついてきた。翼をばたつかせながら。

まあこれはこれでいいんだが、羽がたまに鼻の中に入るからそっちの方ではやばい。

……って、ちょっと待った。オレは例の四択を思い出す。

一、お持ち帰り。

二、交番に届ける。

三、ムシ。

四、落とし主を捜す。

もしかや……、もしかしてオレは、知らぬ間に四番を選んじまったのか？　タイムマシンという、ソフィアをこの世界に落とすしちまった奴を捜す。なんてこった。

はあ……。ついついため息が出てしまった。

気がつけば、朝日が昇っていた。

それは、ソフィアとオレとの何とも不思議な生活が始まる合図だ
ったんだと、そのあとで思った。

(後書き)

中学三年生、高校受験間近に書いた作品です。なのでもう四年前になるのかしら。恥ずかしい箇所が随分と見受けられますね。「オレ」多用しすぎとか色々。

この作品は現在まで続く連載小説の第一話なんですが、こちらのサイトでは一話のみの掲載に留めておきます。そっちの方がはじめがついてて美しいかなど。まあ文章は汚いですが。

なんだかんだ言っただけで最も思い入れのある作品です。ソフィアと統流のいる世界が、私の創作世界のベースであることに違いはありません。

まあ裏話は語る方も読む方も虚しく呆れるものになっちゃいますので、この辺にしておきますか。ソフィアさん可愛いよソフィアさん。

それから作者名は「今田ずんばあらず」ではなく旧P.N「城ヶ崎ユウキ」にしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1997z/>

翼の生えた少女

2011年12月7日04時47分発行